

新学習指導要領の実施が2022年度に迫る中、21年度は、新課程に向けた計画とその実践を通じた授業と評価の改善が求められる。新課程初年度に向け、実践事例や解説記事により現場の疑問や課題を解決し、自校の計画・実践につながる情報を提供する。

— 疑問や課題を解決！実践につながる！ —

# 新課程レポート

ベネッセ教育情報センター

テーマ

## 資質・能力ベースの授業改善

### 実践レポート

科目別ルーブリックを授業に落とし込み、  
教師の指導、生徒の学びの質を高める

### 秋田県立湯沢高校

本誌4月号より取材を続ける秋田県立湯沢高校では、2019年度から全教師が一丸となって教育改革に着手している。現在は、育成を目指す資質・能力（「湯高力」）の科目別の到達度を示すルーブリックを作成し、22年度からの新教育課程に向けた授業改善を推進中だ。今号では、具体的な授業改善の状況を聞いた。

Q1 育成を目指す資質・能力を  
どのように授業で育むのか

A1 学校全体で検討した育成を目指す資質・能力の到達度を示す科目別のルーブリックを教科団で作成し、それらを基に各教師が授業改善を図る

全員で作った「湯高力」を  
教科団でブレークダウン

平田恵子先生（1学年主任）

本校では、育成を目指す8つの資質・能力を「湯高力」と呼んでいます（本誌2021年4月号P.

27。「習得↓利用↓活用」の3段階で表される「湯高力」のルーブリックを、各教科団で話し合いながら教科・科目別に作成しました（図1）。  
実際に科目別のルーブリックを作成してみると、科目によって発

揮する場面がイメージしにくい資質・能力があることが分かりました。例えば、国語科では「課題対応能力」「公共心」は、授業の中で発揮する場面をどのようにつくればよいかイメージしにくい資質・能力でした。しかし、ほかの教科団の先生方と話をしてみると、国語科ではイメージしにくかった資質・能力が、ほかの教科や学校行事等の特別活動では、発揮する場面が容易にイメージできることが分かりました。そのことで、「湯高力」は3年間を通じて、様々な教科・科目の中で総合的に

設立 1943 (昭和18) 年  
形態 全日制/普通科・理数科/共学  
生徒数 1学年約175人

2021年度入試合格実績 (現浪計)  
国公立大は、弘前大、東北大、秋田大、福島大、一橋大、新潟大などに70人が合格。私立大は、岩手医科大、東京理科大、日本体育大、同志社大などに延べ171人が合格。

図1 「湯高力」の到達度を示す科目別ルーブリック (『国語総合』)

科目		国語総合【現代文・古典】		授業時数	週5単位 必修学年・類型 1学年
目標 国語を的確に理解する能力を育成し、適切な表現を通して伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばし、言語文化に対する関心を深める態度を身につける。					
評価の観点	知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性		
湯高力	【知識・技能】	【課題対応能力】【論理的思考力】 【対話力】	【協働力】【自己管理能力】 【前向きにやり続ける力】【公共心】		
活用 (使える)	●読解力と読解のための技法を使い、複雑な論理展開ができる。また、抽象度の高い語彙や表現を使いこなすことができる。 ●古典の読解を通して古代の知恵を自己のものにし、他の古典作品の読解に役立てることができる。	●複雑な論理展開や複雑な表現を分析して、わかりやすく説明したり、自らの考えを論理的に表現したりできる。 ●他作品と比較しながら、その作品の特色をつかむことができる。	●広く社会に目を向け、現象から原理を導き出したり、因果関係を導き出したりする主体性や探究心を身に付けている。 ●古代の人の知恵を自己のものにし、現代の社会や人の在り方について探究しようとする力を身に付けている。		
字びの段階 利用 (できる)	●論理の構成や表現技法を理解し、論理的な文章や文章作品を述べることができる。また、自分の考えを表現することができる。 ●古典や古典文法、古典の背景を踏まえて古典作品を理解することができる。	●論理の展開や表現技法を把握しつつ、文章の主題を的確に捉え、表現することができる。 ●既習作品の内容を踏まえ、他の古典作品を読むことができる。	●論理的・論理的に、自分の考えを他者と伝え合うとする力を身に付けている。 ●古典作品を自ら手に取り、古代人の知恵や歴史を眺めようとする力を身に付けている。		
習得 (わかる)	●語句の意味や基本的な文法の意味を正確に理解したうえで、「話す・聞く・読む・書く」ができる。 ●古代の語句や基本的な文法を理解し、古典を読むことができる。	●基礎的な読解力・文法力に基づき筋道を立てて考え、それを表現することができる。 ●基本的な読解力・文法力に基づき、文脈を捉えながら内容を捉えることができる。	●積極的に読解力を高め、話し・聞き・読み・書き、言語技法を豊かにしようとする態度を身に付けている。 ●古典の世界に関心をもち、文学作品に傾くという態度を身に付けている。		
	・授業時の観察	・授業時の観察	・授業時の姿勢や発声		



平田先生

科目別のルーブリックは同じフォーマットを使い、各教科で話し合って作成しました。教科によって進捗に差はありましたが、「湯高力」を科目の特性を踏まえて評価の3観点に振り分けていく際に、しっかりこないこともありましたが、ほかの科目のルーブリックを見ることで、資質・能力のすべてを自分たちの科目だけで育成するわけではないことを、実感を持って理解できました。また、他科目のルーブリックの記述で参考になる部分を取り入れることもできました。

育むものであり、すべての資質・能力を1つの科目で無理に育成する必要はないのだと気づきました。小松弘樹校長 平田先生が例に挙げた「課題対応能力」は、授業で学んだことを生かして具体的な課題に取り組む際に特に発揮される

資質・能力です。したがって、1つの科目の授業の枠の中にとどまらず、他教科や探究学習、特別活動など、ほかの教育活動と結びつけて発揮していく方が自然です。そのように、ある科目では育成が難しい資質・能力があった時、そもそも私たちが育てようとしてい

「湯高力」の観点で、授業・家庭学習・定期考査を見直す  
平田先生 国語の授業の冒頭では、私は本時の目標として、特に育成を目指す資質・能力を、黒板のマグネットシートを使って生徒に提示しています。また、予習・復習のプリントでは、発揮することが求められる資質・能力を単元や設問ごとに明記しています(P.32写真)。

32写真。こうした取り組みは国語以外の教科でも行われています。授業やプリントで「湯高力」を提示する中で、自分の授業での活動の偏りに気がつくことがあります。また、定期考査の問題も、「湯高力」の観点で見直すことで、知識・技能を問う問題が多くなっていくことに気づき、学力の3要素のバランスをより意識した作問を行うようになりました。

## A<sub>2</sub> Q<sub>2</sub>

科目別のルーブリックを作成することで、授業は具体的にどのようなように変わるのか

授業のねらいを教師と生徒が共有でき、ねらいに適した指導法や学習場面をデザインできるようになった

るのはどのような生徒なのかを考  
えれば、自教科の授業実践にとど  
まらず、ほかの教科・科目との連  
携にもつなげることが出来ます。  
重要なのは、ルーブリックを作る  
ことではなく、そもそも私たちは

どんな生徒を育てようとしている  
のか、授業はその目的に見合った  
ものなのかを振り返り、「湯高力」  
や科目別のルーブリックも柔軟に  
見直していくことです。

そもそも以前は、定期考査の範囲を念頭に置いた進度重視で、ややもすると、目標が不明瞭な授業をしていたように思います。しかし、「湯高力」を生徒に提示することで、進度以上に発問の内容や活動ごとの時間配分、授業と家庭学習の役割分担に気を配るようになりました。具体的には、知識・技能の育成が目的のものは家庭学習とし、授業で取り組むべきことを厳選することで、結果的に単元ごとの進度も今までより速くなりました。

私の授業観が変化したことで、少しずつ生徒の意識も変わってきました。例えば、湯高力に関する生徒向けのアンケート結果を分析すると、2021年度の2年生は「うまくいくかどうか分からない状況でも問題に取り組んでみよう」という項目において、1年前と比較して意識の高まりが見られました。それは、「湯高力」の1つである「前向きにやり遂げる力」を掲げながら、私たちが授業や「総合的な探究の時間」の中で「失敗しても大丈夫」「状況を丁寧に分析すれば解決策は見つかる」

と、何度も声かけしたことが影響していると思います。生徒に、「こうなつてほしい」と繰り返し言葉をかけることで、生徒の意識は大きく変わります。

## 研究授業が「湯高力」の浸透の鍵

平田先生 科目別のルーブリックを絵に描いた餅で終わらせず、

日々の授業に生かせるようになったのは、研究授業が要因の1つだと思います。科目別のルーブリックを作成した19年度、本校では、高校教育課の指導主事を迎えた研究授業、秋田県から指定を受けた探究活動等実践モデル校の公開授業、さらには、校内で定期的に実施している互見授業で、「湯高力」を踏まえた授業改善にチャレンジしました。実際に授業を行ったのは数名の教師ですが、指導案は教科団で作成し、授業後の振り返りには全校教師が参加しました。授業のねらいを資質・能力ベースで意識することの大切さは、そうした一連の取り組みの中で全員が理

### 写真 「湯高力」の育成に向けた実践



平田先生

授業やプリントなどで「湯高力」を明示して、「何を指した学びなのか」を生徒と共有するようになって、今までの自分の授業は、定期考査の範囲をこなすことを優先したものになっていたのかもしれないと、課題意識を持つようになりました。生徒が8つの資質・能力「湯高力」を意識しながら学ぶようになったからこそ、「湯高力」の何がどれだけ向上したのか、それが評定にどう結びついているのか、生徒が把握できる仕組み作りが必要になっています。

解できたと思います。

育成を目指す資質・能力を授業に落とし込む大切さは、本校では周知のものとなっていますが、「湯高力」を活用した多面的な評価のあり方と評価方法の理解が今年度の課題です。既に定期考査などでは、「湯高力」との紐づけが始まっています。それを評定にどう結びつけるのか、教科ごとに検討を

している段階です。「湯高力」を踏まえて3つの観点で評定をつける際、「AAAなら4以上」「BBなら3」「思考・判断・表現は、『湯高力』の重点領域だから、それがBなら4とする」などと、評定の基準や定義を、まずは1学期中に各教科で話し合い、たたき台をつくることにしています。

## Q3

### 教科を超えた「湯高力」育成の取り組みなど、今後の展望は？

## A3

### 教科・分掌の垣根を超えた「教師にとっての学び」を生む校内環境をつくる

### パラダイム転換を起こしやすい環境づくりを

**小松校長** 本校の先生方は今、「ルーブリックがなくても授業はできたけれど、ルーブリックがあることで、育てたい資質・能力を意識し、授業をブラッシュアップしていくことができる」ということを身をもって理解している段階です。先日は、「総合的な探究の時間」や学校行事にも「湯高力」のルーブリックを活用することができないか話し合いました。

教師が、「1年間の探究学習でどのような資質・能力を身につけるのか」「これから取り組む行事でどんな力を伸ばすのか」といったことを語ることは、生徒にとつ

ては「今、自分がここにいる理由」につながります。生徒の取り組みの姿勢はもちろん、教師の指導のあり方も変わっていくでしょう。

学校改革を進める上で、今後も大切にしていきたいと考えているのは、先生方に「改革のレーン」は1本ではない」ことを示し続けることです。「湯高力」を評価・評定にどうつなげていくか、今、各教科で検討が行われていますが、論点や検討の進捗は様々ではありません。しかし、私はその「違い」が重要だと思っています。学校としての指針・方針を共有しながら、教科や分掌の特性を踏まえて、それぞれの考え、ペースで検討しながら、ほかの教科や分掌の考えからも学び、納得できれば自分たち

の考えを大きく転換する。言わば校内で小さなパラダイム転換が起きやすくなるような環境をつくるのが私の役割です。そのために、例えば、1学年団と進路の先生方に1つのテーマについて一緒に取り組んでもらうなど、意図的に複数の教科同士、分掌同士を結びつけるようにしています。

私は、よく先生方に「私を疑ってくださいね」と言います。学校改革にはこうすればうまくいくという正解はないからです。今後も、先生方と対話的に改革に取り組んでいきたいと思っています。



**校長**  
**小松弘樹**  
こまつ・ひろき  
教職歴36年。同校に赴任して2年目。



**1学年主任**  
**平田恵子**  
ひらた・けいこ  
教職歴18年。同校に赴任して4年目。国語科。

新課程に関する情報は、  
**『ハイスクールオンライン』**でお届けします！



事例・解説

- 全国の学校の指導事例を紹介
- 過去のオンラインセミナーのアーカイブ動画・資料も掲載



動画解説

- 有識者による新課程の動画解説も満載